3．高校３年　自立を求めて―生き方を考える―

斉　藤　真　子

Ⅰ．学年テーマについて

高校二年生では「国際理解・人権・平和」をテーマに、沖縄研究旅行を学習の場としてディベートをしたりフィールドワークの研究発表をしたりして、世界を視野にいれて社会認識を深めた。

高校三年生は、一人ひとりが進路を選択する時期となる。進路の選択を単に偏差値に依頼した大学・職業選択としてとらえるのでは、自覚的に「自分の人生」を選択したことにはならない。これからの生涯学習の時代には、長期的展望にたって、幅広く「生き方」を考えることが、必要となる。

高校二年生の総合人間科の自主活動で培った、総合的な問題意識や社会認識を基盤として、自分の人生を自覚的に選択していく力を、高校三年生の総合人間科でのさまざまな取り組みを通して学び合い、一人ひとりが確実に自分の人生＝進路を実現していきたい。

自分を取り巻く社会、自然、人間に対しての総合的な理解が、自分の人生を自覚的に選択するためには必要となる力である。さまざまなものや人との「学び合い」を通して、その中での体験と共感から育つのが、「人間の存在を総合的に理解する力」であり、「物事に対して総合的に判断する力」である。

総合人間科で目標とする「人間の在り方、生き方」を、一人ひとりが自分自身の中で明確なものとして認識することで、自覚的な「人生の選択」が可能なものとなる。

Ⅱ．学習方法と指導体制について

（１）必修総合人間科では次のような学習方法と学習内容に取り組んだ。

① アンケート・ワークシート
　今までの自分自身を夢・職業など進路選択の動機や自己分析を通して確認

② 進路調査研究
　系統別分科会（人文・社会・理工学・農医薬看護・教員家政就職・芸術体育など）

③ フィールドワーク
　将来設計や進路希望に即した進路研究のための訪問調査と報告会

④ 講演
　学外講師（卒業生）による講演会
　―職業選択動機・職業観・仕事内容・生きがい―

⑤ スピーチ「社会と自分の進路」
　分科会ごとに質疑応答と情報交換

⑥ 卒業論文「自立を求めて―生き方を考える―」執筆
　「自分史」をふりかえるとともに、さまざまな進路の中から自分の進路を選択し、社会の中での自分のこれからの「生き方」を考えて、書くことにより確認する。

⑦ 声のメッセージ
　卒業CDの制作

⑧ 学び合い「生き方を考える」
　他の分科会と一緒に語り合うことによりさまざまな「生き方」を出しあい一人ひとりが探る。

（２）指導体制

基本的には担任団６人の専門性を生かした分科会である。アンケートをもとに生徒は関心のある分科会に参加し調査、情報交換、発表、スピーチ、質疑応答、学び合い、執筆、推敲などを行った。分科会ごとに選出された委員２名が、総合人間科分科会代表者として点呼や司会や集計などの取りまとめをする。指導の先生は、授業ごとにその内容とまとめについてのアドバイスや助言をし、一人ひとりの相談にのるとともに、授業の最後には感想と批評を行った。

〔分科会番号〕	〔系統〕	〔使用教室〕	〔指導者〕	〔教科〕
1	人文	B	有田	英語
2	社会科学	社会	佐藤	地理
3	理工	C	福谷	数学
4	農・家政	物理	斉藤	国語
5	医・歯・看護	地学	加藤	養護
6	教員・芸術・体育	A	川合	体育

Ⅲ．第１年から第２年次へむけて（成果と課題）

１　前年度の同学年との比較検討

アンケートにみられる進路意識は昨年と同傾向である。進路決定の要因としては女子の方が現実的で、「自分の能力・学力」を意識しているのに対し、男子の方は自分の希望する進路や職業がまだ現実のものとなっていないのではないかと思われる者が多い。またなりたい職業では、自由業を上げる男子が多い。

「フィールドワーク」や「スピーチ」や「卒業CDの制作」においては、積極的な取り組みがみられた。

２　継続と発展、新しい試み

継続したものは　①アンケート　②系統別分科会による進路調査研究　③フィールドワーク　④学外講師（卒業生）による講演会　⑤スピーチ「社会と自分の進路」　⑥卒業論文「自立を求めて―生き方を考える―」執筆などである。

また昨年度の発展としては、昨年度土曜日に行った「フィールドワーク」を木曜日に変更し、訪問地が午前と午後で二ヶ所可能になったことである。次に、昨年度の「自分史の中の進路」をふまえて、卒業論文「自立を求めて―生き方を考える―」執筆に際しては、事前に「ワークシート」に内容を整理した。自分史を書くことから、現在の進路や将来の生き方へつながる内容を具体的に考えるためである。

新しい試みとして取り組んだものは、⑦声のメッセージ「卒業CDの制作」と、⑧学び合い「生き方を考える」である。学び合いは、他の分科会でのスピーチを聞いて、一緒に語り合うことによりさまざまな「生き方」の可能性を、一人ひとりが考える手段である。

最後に高校二年で学んだことを高校三年でどう発展させていったかについては次の三点が上げられる。

（１）　「学びを学びつつ自ら学ぶことへ」ということで、沖縄研究旅行の中心は「フィールドワーク」である。人々との出会いの中で多くのことを総合的に学んだ。研究テーマについて、直接関係することの他に、高校三年生のテーマである「生き方を考える」時のひとつの出会いとしての意味を持った生徒もいる。

（２）　高校二年生のテーマは、「国際理解・人権・平和」である。高二で培った社会認識を基盤に「社会と自分の進路」のスピーチに取り組んだ。

（３）　高校二年生の総合人間科で目標とした力は、①生徒自ら調査・研究する力②発表・討論する力③まとめ・伝達する力の三点である。高校三年生になり、一人一人が進路の選択の時期を迎え、自覚的に「生き方を考える」ことが必要になった時、偏差値に依存したり受身的な進路選択にはならないよう、それらの力を基礎にした。

Ⅳ．指導の経過

（１）一学期の取り組み

第一回　４月20日

オリエンテーション

総合人間科の目的と内容

① 昨年度の取り組みの紹介　　卒業論文「自分史と進路」から

② 今年度の総合人間科の取り組みについて

テーマ　　内容　　一学期の予定

③ 先生の話「生き方・進路を決めた頃」

④ アンケートについて

第２回　５月18日

系統別進路研究会

担任団による進路別の説明

訪問先調査用紙　提出

訪問先の調査・報告・確認（分科会の先生へ）

大学・短大選びのチェックポイント

「貴社・貴校訪問のお願い」用紙の記入（必要な人）

第３回　５月30日（木）

進路研究のフィールドワーク

（訪問・見学・調査）実施

日程

８：30

ST

フィールドワークの心構えプリント

訪問依頼書

訪問先発表会（６／15）のための報告用紙

９：00～９：30

出発

10：00

第一訪問場所でフィールドワーク

12：00
昼食　（学食などで）
13：00
第二訪問場所でフィールドワーク
15：00
帰宅
訪問先発表会で使う発表資料（パンフレット、名刺など）は保管

第４回　６月１日
講演会　「先輩の話」
第37回生　平成１年３月高校卒
愛知大学法学部法学科卒
病院（総務）勤務
第39回生　平成３年３月高校卒
鹿児島大学工学部電子工学科卒
（パソコン周辺機器メーカー）勤務
第41回生　平成５年３月高校卒
高等看護学校在学中
病院　勤務

第５回　６月15日
進路研究のフィールドワークの発表会
「個人評価表」「進路先訪問報告会記録用紙」提出

第６回　６月29日
卒業研究　テーマと内容説明
ワークシート記入　「社会と自分の進路」のスピーチ要旨作成・提出

第７回　７月６日
卒業研究　準備
スピーチ原稿　「社会と自分の進路」（400字２枚）執筆

（２）夏休み
卒業論文執筆
「自立を求めて―生き方を考える―」
400字詰め原稿用紙10枚（自分史を含む）

（３）二学期の取り組み
第８回　９月７日
スピーチ「社会と自分の進路」①
「自己評価表」「スピーチ評価記録用紙」提出

第９回　９月21日
スピーチ「社会と自分の進路」②
「自己評価表」「スピーチ評価記録用紙」提出

第10回　10月５日
卒業論文「自立を求めて―生き方を考える―」の読み合わせと推敲
卒業論文清書　「自己評価表」提出

第11回　11月２日
卒業CD制作①　（リハーサル）

第12回　11月16日
卒業CD制作②　録音
全員合唱　　クラス別　　分科会別
先生の言葉

第13回　11月28日（木）
学び合い「生き方を考える」
他の分科会と一緒に語り合うことにより、さまざまな「生き方」を出し合い学び合いをする。

第14回　12月７日
卒業研究のまとめとアンケート

Ⅴ．生徒の取り組みと変容

（１）学習の遅れがちな生徒の状況と変容

学年テーマ「自立を求めて―生き方を考える―」は、一人一人の「生き方」を取り上げた学習である。だから、遅れがちな生徒の中には、①自分の進路について悩む②自分の能力・適性が分からない③自分がどのような生き方をしたいのか迷うなどの理由で遅れがちになる生徒がいる。真摯に自己をみつめ、真面目に社会と自分の進路をとらえ、どのような生き方をすべきかをよく考えた生徒ほど、学習が遅れがちになる。そのような生徒の取り組みの過程には意味がある。

遅れがちな生徒の取り組み状況について

①　ワークシート

８項目の内、前半の自分史や影響を受けた人物は記入できるが、後半の具体的な進路や生き方については未定だったり、分からないので空欄が多くなる。

【ワークシート項目】

（１）　社会の動きとともに、自分史を振り返る中で「進路」について考えたことはどんなことだっただろうか。①幼・小学校時代　②中学校時代　③高校時代

（２）　身近な人（親・親戚・兄弟・先輩・先生など）の生き方、職業から影響を受けていることはあるだろうか。影響を受けた人物具体的内容

（３）　総合人間科で扱ってきたことでどのような影響を受けただろうか。

①高二の総合人間科で学び合ったことの中でどのようなことを考えたか。

②「先輩の話」を聞いて感じたことは何か。また職業についてどのように考えたか。

③フィールドワークとして自分自身で大学、専門学校、会社を訪問し、説明を聞いて、どのような意義があったか。進路決定や変更の要因になるようなことはあっただろうか。

④他の人の訪問報告をどのように自分の志望と関連させたり比較させたりして聞いたか。

（４）現在どのような進路を考えて勉強しているのか。具体的にまとめておこう。

（５）進路決定の要因はどのようなものか。具体的に書いておこう。

（６）五年後、十年後の自分は社会の中でどのような仕事や生き方をしていると思うか。

五年後　　十年後

（７）自分の夢や将来の展望についてどのように考えているか。具体的に書いておこう。

（８）社会の在り方や自然環境についての意見を「未来への展望」や「未来への提言」として自由に具体的に書いておこう。さまざまな視点からの意見や「自分の進路」に結びつけての意見をまとめてみるのもよい。

②　進路調査研究

系統別分科会（人物・社会・理工学・農医薬看護・教員家政就職・芸術体育など）にアンケートをもとに分けたが、説明を聞いた後で変更したものが出た。しかしフィールドワーク後に進路変更をしたものについては、本人の了解でそのままにした。

③　フィールドワーク

進路希望に即した、自分のための将来設計や進路研究のための訪問調査ということで、訪問先を二ヶ所決定した。友達と一緒にとか、とりあえず近くの名大の研究室の見学をしたという生徒と、一人で目的を持って訪問した生徒とでは取り組みの姿勢から違いがある。

また報告会で同じ系統でも訪問先が違えば内容もさまざまで、それらの報告をお互いに聞き合ったことは有益であった。

進路を決定した契機としてフィールドワークを挙げているものはかなりいる。

④　講演

学外講師（卒業生）　による講演会　―職業選択動機・職業観・仕事内容・生きがい―

講演後、ある生徒は「僕も卒業後、後輩に進路の話をしに来るよ」とニッコリしながら話した。先輩ということで身近に感じられたのであろう。しかし一方では自分の進路と無関係な人ばかりと受けとめた生徒もいる。聞く生徒の側に、社会人の仕事に対する構えで共通しているものはどんなものかという視点がないのが惜しまれる。

⑤　スピーチ「社会と自分の進路」

フィールドワークの報告会と同様に自分のスピーチよりも他のスピーチを聞いて得るものが多い。「友達がけっこう真剣に考えて農学部に決めたことがわかって、自分のチャランポランさが恥ずかし

い」とか「あんなやつがこんなこと思っているのか」などの感想が出た。

⑥　卒業論文「自立を求めて―生き方を考える―」執筆

「自分史」をふりかえるとともに、さまざまな進路の中から自分の進路を選択し、社会の中での自分のこれからの「生き方」を考えて書くことより、自分自身が自己を再確認することができた生徒がいる。しかし提出が遅れた生徒は、進路の具体的内容を漠然としたままである。高三の二学期の後半は希望と現実とが交錯して辛い時期である。

⑦　声のメッセージ

生徒達の強い希望で「卒業CDの制作」に取り組んだ。全員合唱や声によるメッセージには文字表現と違ったものがある。「将来の夢」を語る場面では、お互いに聞き合うことで消極的な姿勢の者も積極的な取り組みへと変化した。

⑧　学び合い「生き方を考える」

他の分科会と一緒になり、スピーチを聞いて、「生き方」を考え、それを語り合うことにより、一人ひとりが自由にさまざまな「生き方」の可能性を探る。多様性の追求から、それらに共通するものがみえてくる。

Ⅵ．評価について

（1）評価の三つの柱、①自己評価、②相互評価、③教師評価について

①　自己評価

生徒自身による主観的評価であるので、能力や基準が高い生徒は厳しい評価になるし、適当で基準が低い生徒は甘くなる。主観による厳しさと甘さが同居している評価といえる。だから、生徒による自己評価そのものの検証が必要となる。

②　相互評価

生徒は、訪問先報告会の発表やスピーチなどの相互評価の結果を気にかける。だから相互評価の集計を係がすると、自分の発表やスピーチのよい点や問題点を振り返ることができる。

③　教師評価

教師評価は自己評価と相互評価を媒介する評価である。発表会やスピーチや論文執筆時の励まし・アドバイスなどの授業時に行われる助言評価、指導評価はコメントによる評価と同様に教師の力量に差がある。教師にそれぞれの指導の自覚とともに指導方法の研修や情報交換が必要になる。

（2）評価の三つの柱　①自己評価、②相互評価、③教師評価の活用

	①自己評価	②相互評価	③教師評価
a　進路先訪問調査報告会	○	○	○
b　スピーチ「社会と自分の進路」	○	○	○
c　卒業論文「自立を求めて―生き方を考える―」	○	（　○　）	○
d　学び合い「生き方を考える」	○	○	○

（３）四つの評価観点について

Ⅰ　知的関心の形成と問題解決能力 課題決定力・課題追求力・課題解決力

① 自己をみつめさまざまな「生き方」について幅広く理解するとともに進路を決定する力
② 社会の中での自分の「生き方」を考え目標を設定し追求していく力
③ 自分の「生き方」を実現するための進路・資質・能力・学力などの諸問題を解決する力

Ⅱ　体験・コミュニケーション能力 体験学習への意欲・共同連帯・討論主張・相互認識

① 積極的にコミュニケーションをとり実地に調査研究し、報告・発表する力
② 他の調査・研究・報告・発表を比較検討し問題点や相違点について認識し質問する力
③ 正確で要点をおさえ、聞き手にわかりやすいスピーチをする力

Ⅲ　創造的表現能力 自己表現力・発表能力

① 進路希望先訪問報告会での正確で客観的な説明と自分の目で確かめたことを発表する能力
② スピーチ・卒業CD・卒業論文などでの創造的で個性的な自己表現力

Ⅳ　総合的思考力と実践能力 行動力・社会的態度・自らの生活と関わる能力

① 自己をみつめ、学んだことを総合化し、実践の場で生かせる力
② さまざまな社会的態度を理解し、社会への参加や発言などに向けて行動する力
③ 自分の「生き方」を決定するとともに、他者を理解し自己実現に向けて実行する力

Ⅶ．今後の課題

（１）他教科との関連性と系統性
特に、選択総合人間科・国語表現

この教科の目標は「生き方」を考えることなので、すべての教科が一人一人の生徒の中で有機的に総合されてくる必要がある。選択総合人間科のテーマ研究や国語表現のスピーチとの違いを明確化することが必要である。

（２）進路指導との系統性とバランス

自己をみつめ「生き方」を考えることから自分の「進路」を選択をするので、模擬試験や実力テストの偏差値による進路指導とは一線を画する。しかし進路指導とのバランスと系統性を考えると、進路別のフィールドワークの時期は高二ぐらいがよいとの意見もある。

（３）学校行事と総合人間科とのつながり

学校祭などの学校行事には、いろいろな場面で生徒同士が感動を共有する場面がある。総合人間科の授業でお互いのスピーチを聞き合ったり、卒業CDを制作する過程には感動体験の共有がある。学校行事と総合人間科の授業とのつながりが深まり、生徒主体で取り組むことで学校が、生き生きとした学びの場となる。